

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶⑧

こんな事を思い出した。

西に向かつて自転車を漕いでいた。

奥羽山脈からの風（あずまおろし）が家に帰るのを妨げる。

高校からは一時間掛かるが、こう風が強いと三十分もしないうちに手と耳は氷のように冷たい。ますます風は強くなり、顔を上げられないぐらいだ。

東北本線の踏切が鳴つて自転車を止めると、やっと遠くを見る事ができた。すっかり雪化粧した（吾妻小富士）が佇んでいる。

（今夜、こつちも雪がなあ）汽車が通るのを待ちながら思った。

明日からは期末テストだ。しかし、夜の試験勉強はいつこうに進まず、いつのまにか、部屋のこたつで寝てしまった。明け方四時頃、寒くて目が覚める。

（あくあ、寝ちまったなあ。まだまだなのに）と少し落ち込んでいたら、向こうの居間の灯りがついた。そして父と母の話し声が聞こえてきた。

（今日は始発の運転なのがなあ）そんな事を思いながら、父と顔を合わせるのが何だか気恥ずかしくて、部屋の窓から気分転換に外に出てみた。

外は思った以上に雪が積もっていた。

（こんな日に運転があ）雪の日の独特の静けさと妙に清々しい匂いがある。

部屋に戻ろうとしたら、父の車が出ていく音がした。

振り返ると、テールライトの赤い光が遠ざかっていく。

そして車のタイヤの跡だけが外灯で浮き上がってみえた。

（寒いなあ）急いで家の中に入ると、僕の眼鏡は一瞬で真っ白にくもった。